



Data

監督: ジョナサン・テプリツキー
 出演: プライアン・コックス/ミラ
 ンダ・リチャードソン/ジョ
 ン・スラッテリー/エラ・パ
 ーネル/ジェームズ・ビュア
 フォイ/ジュリアン・ウェイ
 ダム/リチャード・ダーデン
 /ダニー・ウェブ

👁️👁️ みどころ

ナチスドイツの侵攻に最も強く抵抗したのはチャーチル。その評価に異論はないが、1940年の“ダンケルクの戦い”と1944年の“ノルマンディーの戦い”に絡めて同じ年に彼の映画が2本も公開されるとは！4年の歳月を経ているが『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』（17年）のチャーチルと本作のチャーチルとの異同は如何に・・・？

両者とも戦闘シーンに頼らず、あくまで苦悩するチャーチルの心の中を映し出すことに力を注いだ。その分、彼の強さも弱さもクッキリと！とりわけ、妻と秘書に対してそれは顕著だ。

リンカーンの演説やJ・F・ケネディの演説、『チャップリンの独裁者』（60年）の演説、そして、1945年8月15日のラジオに流れた天皇陛下の玉音放送。歴史に残る名演説はたくさんあるが、“史上最大の作戦”を伝えるチャーチルの1944年6月6日午前6時のラジオでの演説は如何に・・・？『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』でみた、1940年5月28日の下院での演説と対比しながら、それをしっかり味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■チャーチルが続けて2本も！今度はノルマンディー■□■

私は2018年3月31日に『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』（17年）を観た。日本人の辻一弘氏が第90回アカデミー賞メイクアップ&ヘアスタイリング賞を受賞した同作は、1940年5月の“ダンケルクの戦い”をテーマとし、5月28日にチャーチルが下院で行った名演説をラストのクライマックスとする映画だった。

また、『ヒトラー～最後の12日間』(04年)が総統官邸地下要塞にこもった1945年4月20日から4月30日に自殺するまでのヒトラーの「最後の12日間」を描く名作だった(『シネマ8』292頁)のに対して、同作はチェンバレン内閣に対する不信任決議が出された1940年5月9日から、チャーチルが首相に就任し、5月28日に下院で歴史に残る名演説を行い、「ダンケルクの戦い」に至るまでの27日間を描く映画だった(『シネマ41』26頁)。

同じ年にチャーチルを主人公とした映画が2本も続けて製作・公開されたのは驚きだが、本作はその“ダンケルクの戦い”から4年後、1944年6月の“ノルマンディーの戦い”に臨むチャーチルの4日間(96時間)の姿を描くと共に、6月6日午前6時にチャーチル(ブライアン・コックス)がラジオで行った名演説をクライマックスとするものだ。『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』が対ナチス戦争開始直後の意気軒昂なチャーチルを描いたのに対し、本作は対ナチス戦争を終結させるためのパリ解放作戦と、ダンケルク上陸作戦に向けて、何とも弱気になっているチャーチルを描いている。そりゃ、対独戦争という非常時において4年間も政権を担ってきたとなれば、チャーチルの疲労も相当なもの。年齢も既に70歳だから、肉体的にも精神的にも疲れが出ているのは仕方ない。ノルマンディー上陸作戦は、連合国軍最高司令官になっているアメリカのアイゼンハワー将軍(ジョン・スラッテリー)の指導下で立てられた作戦だが、それに対してチャーチルはいかなる対応を・・・？

■□■ “史上最大の作戦”をどんな視点から？ ■□■

1944年6月6日に実施されたノルマンディー上陸作戦は、私が中学生時代に、“史上最大のオールスター”によって『史上最大の作戦』(62年)として公開され大ヒットした戦争巨編。また、2012年9月に私が鑑賞したのが、スティーブン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』(98年)だが、これは連合軍のノルマンディー上陸作戦を背景としながら、ライアン二等兵の生き方に焦点を当てて描いたものだった(『シネマ1』117頁)が、その冒頭20分間の戦闘シーンはものすごい迫力で、観客の度肝を抜くものだった。

本作は、それと同じ「史上最大の作戦」をテーマにしているものの、その是非や内容はチャーチルの頭の中にあるだけで、観客はその是非や内容について見せてもらうことは全くない。観客がスクリーン上で観るのは、徹頭徹尾ノルマンディー上陸作戦について考え、悩んでいるチャーチルの姿だけだ。しかも、それが上昇期にある人間が見せるテキパキとした判断なら気持ちがいいが、自らの失敗体験に怯え、ノルマンディー上陸作戦で多くの若い兵士たちを失うことを心配するあまり、作戦そのものの実行に反対し、アイゼンハワーたちに抵抗するチャーチルの姿を描くものだから、あまりカッコいいものではない。しかも、会議で自分の考えが採用されずイライラするツケは、妻のクレメンティーン・チャ

ーチル（ミランダ・リチャードソン）やタイプストのギャレット秘書（エラ・バーネル）に向かってくるだけだから、クレメンティーンもギャレットもたまったものではない。ギャレットは泣くだけだが、クレメンティーンの方は家出を決意する有り様だから、チャーチルは今や公私ともにガタガタの落ち目状態に・・・？

しかして、史上最大の作戦の成否は？そしてそれに影響する当日の天候は？『三国志』における「赤壁の戦い」（208年）は、諸葛孔明の気象学の知識によって、魏の曹操はもちろん、呉の孫権や周瑜たちも驚く孫権＝劉備玄德連合軍の大勝利になったが（『レッドクリフ part I』08年『シネマ 21』34頁、『シネマ 34』73頁）（『レッドクリフ part II』09年『シネマ 22』178頁、『シネマ 34』79頁）、その当時より格段に進歩していたはずの気象学を駆使した作戦当日の天気予報は・・・？

■□■チャーチルの人物像は？■□■

『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』でも、チャーチルの“人物像”は酒好き、葉巻好きが目立っていたが、それは本作も同じ。チャーチルを主人公にした映画では、葉巻を吸う姿をいかにキメるかが映画の成否を分けるほどだ。『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』ではチャーチルはまだ若かった(?)ので、1人で地下鉄に乗って国民の声を直接聴取する元気を見せていたが、それから4年後の本作ではチャーチルにそんな元気は全くなく、せいぜい海岸を散歩しながら思考をまとめるくらいだ。また、『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』ではメイクアップ技術を駆使してのチャーチル像をスクリーン上に作り出していたが、本作はそうではなく、あくまで俳優・ブライアン・コックスの素顔のままにチャーチル像を見せることに徹している。どちらがホンモノのチャーチルに近いのかは私にはわからないが、本作はとことんチャーチルの内面に焦点を当てた映画だから、チャーチルの葉巻を吸いながらの苦悩ぶりが本作のポイントになる。

第一次世界大戦でチャーチルが海軍大臣として自ら立案し、遂行した1915年2～3月の「ガリボリの戦い」で50万人もの若い兵士を死傷させたことがチャーチルの心の重荷になっていたことは本作にみるブライアン・コックスの重厚な演技でよくわかるが、いつまでもそれを引きずっていても仕方ないのでは・・・？しかも、戦闘シーンが全くないまま、始めから終わりまでチャーチルの苦悩ばかりを見せられ続けていると、私も含めて観客は少しウンザリしてくるのでは・・・？自分の考えがアイゼンハワー将軍に却下されてイライラするチャーチルが国王ジョージ6世（ジェームズ・ピュアフォイ）の訪問を受けて“国王の仰せのままに従う”姿も私には少し疑問がある。つまり、それでは首相や国防大臣としての実務の責任を果たせていないのではないかという疑問だ。また、落ち込んでいたチャーチルが作戦決行の前日になって夫婦喧嘩の結末を含めて少し元気になっていく姿も私には少し違和感があったが・・・。

■□■たしかに演説はうまいが、ラジオでは・・・？■□■

ロンドンで生まれたチャールズ・チャップリンの誕生日は1889年4月16日で、オーストリアに生まれたアドルフ・ヒトラーの誕生日である1889年4月20日と4日だけ違っている。それから約50年後、2人は立場こそ違え、互いに映画と政治の世界を代表する第一人者に成長していたが、チャップリンは“独裁者ヒトラー”を批判し、揶揄するべく、『チャップリンの独裁者』（40年）をそれまでの無声映画からはじめてのオールキーで監督すると共に、自ら一人二役で主演した。その最大の見せ場が、ラスト6分間に及ぶ、映画史上に残る名演説だ。

しかして、『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』も本作も、ラストで見せるチャーチルの演説が最大の見せ場となる。そして、前者は1940年5月28日に下院で行ったものとされ、後者は1944年6月6日午前6時にラジオで行ったものとされているが、ネットで調べたところ、いずれもその年月日での演説は記録されていないから、ひょっとして両者とも映画でのつくりもの・・・？それはともかく、『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』におけるチャーチルの演説はたしかに身振り手振りを交えた名演説だったが、本作にみる演説はラジオ放送のためにマイクの前で行ったものであるため、その迫力はイマイチ。1945年8月15日に日本の天皇陛下が行った“玉音放送”は、どんな映画でも使われる大きな歴史上の出来事だったが、1944年6月6日午前6時のノルマンディー上陸作戦についてのチャーチルのラジオでの演説は、そんなに価値あるものだったの・・・？

2018（平成30）年8月31日記